

NMO OfficeLetter

京の町衆のお祭り！ユネスコ世界文化遺産「祇園祭」

山鉾巡行は本来、神輿渡御に伴う「露払い」の位置づけで、神幸祭に先立つ「前祭り(さきまつり)」と還幸祭の「後祭(あとまつり)」がある。高度成長期以来、交通渋滞や観光促進を理由に、前祭と後祭の合同巡行が続いていたが、祭り本来の形を取り戻そうと分離が決定。2014年、約半世紀ぶりに後祭の山鉾巡行が復活した。毎年、7月1日の「吉符入り」で幕を開け、2日には山鉾巡行の順番を決める「くじ取り式」が京都市役所で行われる。10日頃から前祭の鉾建てが始まり、12日頃には鉾の「曳き初め」がある。12日頃の「曳き初め」は、女性を含む一般市民も参加できることが多い。16日の宵山までは、各山鉾町ではちょうちんの明かりに照らさ



れた山や鉾が楽しめる。各山鉾では、病気除けとされるちまきや、学問成就や立身出世などのお守りを手に入れることもできる。14日の宵々々山、15日の宵々山、16日の宵山を経て、17日は、前祭の23基の山鉾が祇園囃子にのって京都のメインストリートを巡行する。午前9時、計23基の山鉾が四条烏丸付近を出発。四条通を東へ向かった後、河原町通を北上し、御池通を西進する。四条麩屋町での長刀鉾稚児による「しめ縄切り」や、山鉾が各交差点で方向を変える「辻回し」などが見どころ。前祭山鉾巡行の翌日から、後祭に向けて大船鉾の鉾建てが始まる。21～23日は宵山期間で、24日は後祭の山鉾巡行。あわせて花笠巡行も繰り広げられる。夕方には、神輿が御旅所から神社に戻る還幸祭がある。

<解説> 祇園祭は、もともとは平安時代前期の869(貞観11)年、京で疫病が流行した際、広大な庭園だった神泉苑(中京区)に、当時の国の数にちなんで66本の鉾を立て、八坂神社の神輿(みこし)を迎えて災厄が取り除かれるよう祈ったことが始まりとされる。応仁の乱(1467～77年)で一時山鉾巡行は途絶えたが、1500(明応9)年に町衆の手で再興された。以後、中国やペルシャ、ベルギーなどからもたらされたタペストリーなどを各山鉾に飾るようになった。これらの懸装品の豪華さゆえに、山鉾は「動く美術館」とも呼ばれる。江戸時代にも火災に見舞われたが、町衆の力によって祭りの伝統は現代まで守られている。2009年にはユネスコ無形文化遺産に登録された。祇園祭の「ちまき」は、厄除けのために各山鉾町で売られている。ちまきが厄除けの役割を担っているのは、八坂神社の祭神が旅の途中でもてなしてくれた蘇民将来に対し、お礼として「子孫に疫病を免れさせる」と約束し、その印として「茅の輪」を付けさせたのが始まりと言われる。授かったちまきは、家の門口につるして



おき、翌年の祇園祭で新しいちまきと取り替えるまでの1年間飾る習わしだ。厄除け・災難除けとして重宝されている。祇園祭のちまきは、食べ物ではない。通常は、ササの葉をイ草で巻き、束にして作られる。しかし2006年には黒主山保存会が、祇園祭で初の「食べられるちまき」を販売。「食べられる」と勘違いする人もいることから発想を転換し、生麩でちまきを作り、話題になった。